
迷子のすすめ

翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子のすすめ

【Nコード】

N6491M

【作者名】

翔

【あらすじ】

明智宗治、16歳。

容姿：至って普通、性格：比較的温厚な真面目な高校2年生。

「婚約者候補」？

「執事」？

いきなり降って湧いたあり得い環境。

(；・・)なにいつ

「おれの宗治に手を出すなっ」

いやいや、月之丞

俺はお前んじゃないからな

草食男子を巡るとはたラブコメディ。

「俺の平穩はどこにいったんだあ」

振り回される宗治君をお楽しみ下さい(笑)

こちらは同名義で活動している他携帯サイトの内容を変更したもののです

プロローグ

ヒーロー、っているじゃん？

変身なんかしちゃって、沢山味方がいて、秘密基地なんて持つちやって。

しかも極めつけ、宇宙から来た宇宙人と地球を守るために戦うんだ。

ガキの頃に憧れた、テレビの中の英雄たちってさ。

すんごく強くてさ、色んな悪いヤツを簡単に倒しちゃうの。

強敵が現れても、最後には絶対勝つんだ。

俺は、いつかそんなヒーローになりたかったんだ。

たった1人だけでもいいから、誰かのヒーローになりたいって思っていたんだ。

プロローグ（後書き）

更新はまったり。

0・5 俺が初恋を諦めた理由 その1（前書き）

本当は翔の別小説の恋敵役にしようかと考えてきた宗治君。

しかし、あまりに良い人過ぎて、それは出来なくなってしまいました。

そんな宗治君が思い人を諦めることになった理由です。

0・5 俺が初恋を諦めた理由 その1

「宗治君」

鈴を転がしたような、春に咲く小さな花が微笑んだような。そんな声が俺の名前を、ゆっくりと呼んだ。

昼休み。雑多な音。カーテンを閉めてなお、差し込む日光でうら明るい教室。

日当たりが至極良いこの教室は、夏を除く季節の居心地はすこぶる快適だったが、今の季節は情眠を貪るには宜しくない。

だけど剣道部の朝練習から始まる俺の朝はとて早くて、午後には本番といった練習が待っている。

昼食を摂り終えた昼下がりが、こうして昼寝をすることはキツイ午後からの練習を耐え抜く為に必要なものなのだ。

その水のように生命維持に大切な眠りを妨げられることは、本来ならば大嫌いなことだった。

しかし。

机に伏せていた顔を、その可愛らしい声に釣られるように緩慢に上げる。

覚醒しきっていない脳みそでも、その優しい声を忘れ去ったわけではないらしい。

そう、さして大きくもない、やっと会えた恋人同士のようにひつついて離れたがらない臉をこじ開けた理由は。

この声の主が見たかったからに他ならない。

「……月華ちゃん？」

我ながら寝ぼけている掠れた声が、声帯を震わせて言葉を成した。きつと顔は大層な間抜け面をしてるに違いない。それでも、俺は彼女を自分の視界に入れたかった。

「寝てるどころごめんね、宗治君」

少し明るい茶色の髪。それと同じ色の大きな瞳。ふっくらとした頬、柔らかそうな桃色の唇。

前髪に隠れた眉は、俺を起こしたことを申し訳なく思っているのか、少しだけ垂れていた。

黒髪に黒い瞳である純日本人の俺と違う色をしている理由は至極簡単。彼女には25パーセント、外国の血が混じっているからだ。どうやらお父さんがハーフらしい。

「うっん、全然大丈夫だよ。
気にしないで」

伏せていた上半身を起こして、水を体に受けた犬のように左右に首を動かした。

同じ姿勢をとっていたせいか、激しく動かした首の筋に痛みが走った。

「いたたっ」

痛みを感じた患部に手をやると、

「大丈夫？」

大きな瞳がこちらを心配そうに覗き込んできた。
慌てて腕を前に出し、問題ないと手の平を動かした。

痛い。この手の神経的な苦痛は肉体的苦痛に慣れているはずの俺にも苦手なもので、本当ならば文句を言ってやりたい。

特に彼女と同じ顔をした人間になら、間違いなく噛み付いたのに、今、俺を起こしたのは四聖「月華」ちゃん。俺の片思いの相手、なのだ。

話しかけられて嬉しい思いこそあれ、こんなときだって迷惑に感じるはずはない。

いきなり起こしてごめんね、と申し訳なさそうに眉を寄せる彼女は花の妖精のようにとても可愛らしい。

二重の大きな瞳には、優しい光が宿りいつもにこにこしている。ぷるんとした唇は薄くもなく、厚くもなく。そこには笑みが広がっている時間が多い。

天使の輪が輝く髪だって、染色してないせいかとても綺麗だし。真っ白な肌理細かい肌だって、……触れたことはないけど、とても抱き心地が良さそうで……。

声だって、こんなにも耳に心地いい。彼女のわがままだってら、何でも喜んで聞いてしまいそうだ。

そんな歩く理想が俺の眠りを妨げても、怒る理由なんて何にも見つきりそうにない。

探せ、と言われたって無理だと思う。

「それでどうしたの？」

目を擦りながら、黒板の上に掛かった時計で時間を確認する。
寝てから15分くらいは経過していた。さつきより身体も随分と
軽くなっているから、今日の部活も問題はないだろう。
もう少し寝たかったけど、これくらいなら大丈夫だ。

「うん、あのね」

彼女は胸元に、両手に包むように持っていたものを俺に差し出す。
それは、愛らしい猫のストラップがついた、彼女の携帯電話だっ
た。

え？もしかして番号交換とか……？

いらぬ期待が胸の中を駆け巡る。

普段は回らない思考回路が、彼女のアドレスにメールを打つ自分
の姿を瞬時に想像させた。

浮き立つ俺の妄想は彼女の一言で音を立てて崩れ去った。

「……お兄ちゃんから宗治君に電話なの」

「……月乃丞から？」

俺の口元がぴくぴくと痙攣してしまったのを、彼女は目にしたの
だろうか。

ますます心苦しそうな表情になったのだった。

「……なんだよ」

月華ちゃんから携帯電話を受け取って、廊下で電話に出る。教室の中は快適な温度に設定されているが、廊下までは空調はない。

もわつとした日本特有の湿度の高い気温が、嫌な空気が身体にまとわり付く。

そして、幼い頃より運動をしているせいか、他人より汗腺が出来上がっているのか、汗をかきやすい体質であるようだ。

しかし、それ以上に。

一瞬だけ触れた彼女の指の感触に、どきまぎしながらも。その緊張を相手に知られないようにするために、電話の向こうに少しだけ横柄な態度をとってしまったのは 俺の未熟さのせいだ。

『なんだよ、って何で不機嫌なんだよ』

「うるさい！ さっさと用件を言え！！ 俺は眠いんだっ」

ここに月華ちゃんはいないのを好いことに、俺は不機嫌を表に出して親友を内心睨み付けた。

そんなことをしたところで、気にも留めないとばかりに方眉が少し角度を変えるだけだと知っているが、そうでもしないとこの腹の虫は収まりそうにない。

こんなこと言ったら真顔で「寄生虫の検査に病院に行け」と突っ

込まれそうだけど。

月華ちゃんに声を掛けてもらった理由がお前からの電話だなんて……今になって思えばとんだ糠喜びだ。

*

0・5 俺が初恋を諦めた理由 その1（後書き）

電話番号を期待した宗治君。

ピンクの妄想をつけてやるつもりだったのですが、宗治君が可哀想になるのでやめておきました。

お次はその2です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6491m/>

迷子のすすめ

2011年10月6日08時27分発行